

生・労働・運動 Net jammers からのよびかけ

生・労働・運動 Net jammers は、
すさまじいまでの社会の破壊・解体のおしつけに、
醜いまでの競争へのかりたてに、
さむざむしいまでの「自己管理・自己責任」の檻への閉じこめに、
あらがって、自らの個性のかけがえのなさにもとづいて、生・
労働の自律^(註・1)・自己価値化を求めて、「運動」する者の連結体
である

今、生・労働・運動 Net jammersは、連結体の構成メンバーが、その「労働」^(註・2)現場において加えられている「配転」攻撃に対して、反撃を開始しようとしている。

^{ネオリベラリズム}
「新自由主義主導の構造改革」によって、社会全域にわたる「市場原理」化がすすみ、いわゆる社会の二極化・「労働」の二分化が著しい。このたび私・たちの構成メンバーに加えられた「不当配転」攻撃は、このような状況下において、許しがたいことだが、まごうことなく、普遍的な「労働」者攻撃のひとつである。

改めて言うまでもなく、この状況の下での「労働」者に対する攻撃は、とりあえず「労働」者管理のレベルで言えば、一方で「ポスト・フォーディズム型(環境管理型)」「労働」者管理の「洗練」化、他方で従来からの「フォーディズム型(規律訓練型)」「労働」者管理の「苛烈」化によって、おしすすめられている。

経営環境の^{ネオリベラリズム}新自由主義化の大波に足下を洗われながら、従来からの「労働」者管理「フォーディズム型」のそれと家父長的な「労働」者支配との混合から離陸できぬまま、かえってより一層、それに執着を深めることで、なんとか生き残りをはかろうとする企業・経営体の実態は、その矛盾・ずれが、すさまじい「労働」者に対する「労働条件」の破壊・使い捨て・切捨てを帰結することにおいて、とりわけ「サービス労働」(医療・介護など)「情動労働」にかかわる企業・経営体に共通しており、このたび、私・たちの構成メンバーに加えられた攻撃は、その一端を示すものに他ならない。

周知のように、このような実態は、同時に、よりいっそうの「労働者組合」の機能のほとんど全面的と言ってよいような解体を引き起こしつつ、他方で「個別労働紛争」といわれる事態を急増させている。この間のいわゆる「労働紛争解決システム」の「多様化」の導入は、一方で「労働者組合」の全き解体をおし進め、他方で「個別労働紛争」の社会問題化を未然に防ぐ装置の設定をはかるという志向を、推進力としている。

「個別労働紛争」——これは、決して「価値中立」的な呼称ではない。しかし、また、このような呼称を生む実態が、このような呼称が流通することじたいが、現下の「労働」をめぐる状況のリアリティに対応していることに、注目しなければならない。必死に自らの果たすべき役割の発揮を試みつづける数少ない「労働者組合」を構成する「労働者」以外の全ての「労働」者の生・労働にとって、「個別労働紛争」は、その直接の当事者になる・であるか否かのいかんをとわず、きわめてリアルなものとして存在している。

私・たちは、このリアリティを、私・たちのチャンスと捉える。私・たちは「個別労働紛争」と「集団的労使紛争」という二項対立——というよりはむしろ後者の前者への拡散・無力化をはかる仮構された二項対立をこえて、「個別労働紛争」を「個体的労働紛争」とあえて誤読することを、試みよう。つまり、「個別労働紛争」を「集団的労使紛争」へと展開されることを未然に押しとどめるべきものとして捉えるのでもなく、また、「集団的労使紛争」へいたる前段階にあるものとして捉えるのでもなく、それじたいとして自立すべきものと、捉えよう。

むろん、これは字づら上の誤読であって、「個別労働紛争」なる呼称で呼ばれる実体は、個々の「労働」者の、いかなる「集団」性にも仮託できず、ただおのれの個性性にもとづく怒りから発するやむにやまれぬ抗争においてのみ成り立っているのであり、その成り立ちのありように即して、「個別労働紛争」という呼称(=他称)は、「個体的労働紛争」という呼称(=自称)によって、くつがえされなければならない。

私・たちは現下の「個別労働紛争」を、ひとの生のかげがない個性性の発現として、今日における私・たちの**生・労働・運動**の基本形のひとつとして、立ち上がらせるべく、闘おう。

私・たちは、一方でそれぞれの個性性において「個体的労働紛争」者となり、その存在じたいが「個体的労働紛争」係争中であるかのような存在であることを強いられている

「非正規不安定雇用労働者」と連結し、他方で「個別労働紛争」といわれる場合の「労働」（つまり「賃労働」）を超えて、この私たちが生きる社会における生労働（つまり私たちの生の内実をなす「再生産労働」を含む多様な「不払い労働」・「非労働」（と見なされるもの）との連結の社会化をおし進め、それらの「生労働者（あるいは自己自身の生労働者性において）と群れつどうとき、私・たちは、私・たちの生・労働の自律・自己価値化をめざす闘いを、私・たちの**生・労働・運動**として、この社会を亀裂・解体させる力に対する敵対性において、立ち上がらせることができるだろう、と確信する。

この確信にもとづいて、私・たち——**生・労働・運動 Net jammers**は、私・たちの構成メンバーに加えられている攻撃にたいする反撃を進める——

あなたの**生・労働・運動**の〈目〉・〈耳〉・〈口〉・〈手〉を、私・たちに連結してくれるよう、呼びかける。

「個別労働紛争」 / 「集団的労資紛争」といういつわりの二項対立を超えて、「個体的労働紛争」を、そこここに、群生させよう!!

註・ 1

ここでいう労働の自律とは、現在画策されている「労働法制」再編の中で取りざたされている「自律的労働」とは、似て非なるものであって、「資本からの自律」を意味する。しかし「自律的労働」なるものが登場することじたいが、ひとびとの生・労働・運動において避けがたく進む労働の自律・自己価値化への欲求の拡大・深化におされての反転された反応であることに、注目したい。その**反転の反転**をめざすことこそ、**生・労働・運動 Net jammers**の課題である。

註・ 2

ここでの労働に括弧をつけて「労働」としているのは、それが「賃労働」であることを強調するためで、以下同様。**生・労働・運動 Net jammers**は、労働者と「労働」者とはどのように連結することが可能かという〈問い〉への挑戦を試みることを、その大きな課題としている。